

星医会発足30年、おめでとう

元医学部長 黒川 清

皆さん、久しぶりです。

星医会が発足した30年前はどんな時代だったでしょう。高成長時代の最後の10年、「ジャパンアズナンバーワン」などとうぬぼれていた時代から、高齢社会、少子化、核家族、都市化はさらに進んでいく時代。そして星医会発足10年後の平成に入るとバブル経済がはじけ、冷戦が終わり、ネット時代のグローバル時代のはじまり。その後の20年、経済が低迷している日本、成長するアジア、変わる世界。

グローバル時代のモノ、ヒト、カネが世界を動き、インターネットで情報が広がり、社会の、患者さんの権利意識が変化し、「プロ」への社会の目が厳しく、「医療事故」が問われ、「患者様」という言葉が当前のように使われる時代。

「EBM」が始まり、ウェブ、メール、携帯電話から「iPhone」の時代。「デジタル」の革新性とその広がりインパクトは計り知れない。医学教育にも新しい波が押し寄せる。

とんでもない大変化がどんどん進んだ30年でした。

皆さんは、このような急速に変化する時代のどの年月を、伊勢原で学んだのでしょうか。そして、伊勢原で病院研修し、一時的にしても、この医学部に、病院に勤務してきた人たちも多いと思います。東海大学はあなたたち一人ひとりの家ですし、あなたたち一人ひとりが私たちの誇る子供たち、家族の一員です。

私は縁があって、佐々木先生、玉置先生という大変に優れた指導者の後任として、1996年7月から2002年3月までの6年弱を医学部長として、東海大学医学部の皆さん、つまり教員、学生、研修医、学部と病院の多くのスタッフの方々と一緒に仕事をす

る、またとない大変に得がたい経験をもつ機会に恵まれました。私の日米10数年を超える医師としてのキャリアでも、とても思い出の多い、今でも忘れられない大事な年月です。

新設の医学部のはじめの10年、本当に大変だったと思います。皆さんたちが、力を合わせて築いていった10年。新しいグローバル時代へ向けて、日本では最も意欲的に、世界の趨勢を見ながら医学教育改革に取り組み始めていた東海大学医学部。そんなときに私もその意欲に引っ張られて東海大学の活動に参加させてもらいました。私にとって、とても幸運なこと、新鮮な経験でした。

時代の変化を受けて日本の大学改革は待たなしであり、私は機会あるごとに発言し、できるだけのことを進めてきたつもりです。

米国の大学と日本では国立大学しか知らない私から見ると、私立大学は国公立大学にない良さがいくつもあります。皆さんの支援もあって、国公立大学ではできないような「改革」を進めること、実践することもできました。また、私立大学の難しさ、総合大学での医学部の難しさも理解できるようになりました。にもかかわらず、東海大学医学部では、いくつもの変革、改革が、よそを先取りするように、明らかに進んでいます。どこにでもあることですが、日本の社会の、また大学の、そして東海大学に特有な課題を抱えながらのことですが。

国の医療政策への対応、財政問題、診療と診療科の編成、新病院建築、教育問題、国家試験、学士入学の推進、海外でのクラークシップの拡大、研究活動推進等々、多くの課題を皆さんと分かち合い、協力を得ながら解決策を模索し何とか対応してきた6年でした。学生さんたちにとってご家族の方々の応援は、本当に頭が下がるほどうれしいことでした。

恩師の方々からのご挨拶

星医会30年。卒業生にはいろいろな思い出、想いがあるでしょう。還暦を迎える方も出てくるころです。時間のたつのは本当に早いものです。

社会の基盤である医療。医療崩壊などが叫ばれる中で、それぞれがそれぞれの立場で、卒業生の皆さんが、医師の道を着実に、また精一杯、患者さんと家族のために、後輩の育成に、また社会のために活躍しています。診療の現場で、病院の現場で、教育の現場で、母校の、そして他大学の教員として活躍しています。素晴らしいことです。素晴らしい星医会の仲間たちです。

東海大学医学部の現場から離れてもう6年になりますが、いつも皆さんの活動を見聞きして、とてもうれしく感じています。これからの皆さんには、困難でも充実したキャリアを、仕事を、生活をエンジョイしていただいていると本当にうれしいです。

星医会30年。本当におめでとう。

そして、家族を大事に、そして、後輩たちをくれぐれもよろしく頼みます。

(医学部長1996-2002年、
総合医学研究科長1996-2004年)